

建仁寺両足院所蔵以酏庵関係史料の情報化

岩崎 宏之：筑波大学歴史・人類学系

総括班ならびに計画研究「琉球沖縄の歴史的文物の情報化」(研究代表者：岩崎宏之・筑波大学歴史・人類学系教授)と公募研究「環東シナ海貿易圏における琉球・対馬・朝鮮間交流史の研究」(研究代表者：西村圭子・日本女子大学文学部教授)は、京都大学人文科学研究所による漢籍調査と共同して京都建仁寺両足院に伝来した諸資料の調査を行ったが、対馬以酏庵輪番に関する史料多数を収集し、その情報化を進めることが出来た。

「以酏庵」の歴史は、対馬島主宗家第十六代義調が天正八年(1580)筑前博多の聖福寺住職、景翰玄蘇を対馬に招いて日本国王使として李氏朝鮮との歳遣船の交渉に起用したことに始まるとされている。玄蘇は慶長16年に逝去し、「柳川事件」後の寛永12年から対州修文職として京都五山碩学僧の以酏庵輪番制が始まった。以来、天龍寺、東福寺、建仁寺、相国寺の四山から選ばれた碩学僧の対州修文職は、対馬以酏庵に駐在して外交文書の処理、朝鮮信使の応接にあたり幕末の慶応2年(1866)に修文職が停止されるまで続いた。現在、以酏庵関係史料のうち公式文書は「本邦障膺往復書」として韓国文教部に所蔵され、またその一部は対馬宗家文庫に所蔵されるが、この両足院所蔵の以酏庵関係文書は、建仁寺派遣の輪番僧が持ち帰った文書である。対馬に派遣された碩学僧は、在番中の公務の詳細な記録はもちろん、対馬派遣を任命されてからの細々とした出発準備や島での日常生活の細部を日記に記し、また実務上の参考として調べた昔日の各種記録などを作成して出身の五山に持ち帰った。建仁寺両足院所蔵文書は、このような各種記録が各塔頭において所蔵されたものの一つであるが、たんに一塔頭の部分的史料としてではなく、その内容は以酏庵活動の全貌を知ることができる貴重なものと考えられる。本重点領域研究では環東シナ海地域間交流史に関する基本的史料として建仁寺両足院所蔵資料に注目し、1995年11月に本文書の写真撮影を行った。貴重な史料の閲覧をご許可くださった建仁寺両足院にたいして感謝申し上げる次第である。

なお、本文書については、西村圭子「対馬宗家の近世朝鮮貿易に関わる以酏庵史料についてー建仁寺両足院所蔵文書を中心にー」(日本女子大学史学研究会『史艸』第38号、p.186~227、1997年)が詳細な解説を加えている。参照されたい。